心の栄養剤No143-①「大富豪の息子を貧しい土地へ」

中国のとある大富豪の男性が自分の息子を田舎の土地に送りました。
裕福な生活を当たり前と思っている息子に、一度「貧しさ」というもの体験してもらい、自分たちの生活がどれだけ幸せなものなのかを知って欲しかったのです。息子は田舎に送られ、その土地の家族と一緒に生活をしました。
そして3日後、帰ってきた息子に貧しい生活がどんなものだったか聞きました。

父　　「あっちでの生活はどうだった？」
息子　「うん、よかったよ！」
父　　「こっちの生活と向こうの生活、どう違ったかな？」
息子　「ああ！違いなんて、もう沢山あったよ！」

息子は答えます。それを聞いてお父さんは安心します。自分の思った通り、「お金を持っていることが幸せ」だということに気づいてくれたと思ったからです。しかし、息子が言った言葉は意外なものでした。

息子　「僕たちは犬を1匹飼ってるよね。でもあの家は4匹も犬を飼っているんだよ！」
息子　「僕達の家には綺麗に浄水された水がはられたプールがあるよね。でも、あの家にはとっても大きな池があって、その池はすごく透き通ってて、新鮮なんだ。しかも、そこには魚もいたんだよ！」
息子　「僕達の家には庭を明るく照らしてくれる照明があるよね。でもあの家はお月さまとお星さまが庭をとても綺麗に照らしてくれるんだ！」
息子　「僕達の家の庭は、壁に囲まれているよね。でも、あの家には壁なんて無いんだ。まるで地平線の彼方まで庭が続いているみたいなんだよ！」
息子　「僕たちは家に帰ったらいつもCDを聴いているよね。でも、彼らは鳥のさえずりとか、自然の音を聴いて楽しんでいるんだ。」
息子　「僕の家の周りには、安全のために壁があるよね。でも、あの家はいつでも友人たちを迎え入れられるようにドアでさえ鍵をかけていないんだ！」
息子　「この街では、みんな携帯とパソコンが僕達を繋げてくれているよね。あそこでは、家族や自然がみんなを繋げているんだよ。」

お父さんは驚きのあまり声がでません。そして最後に、息子は満面の笑みでこう言いました。**「お父さん。僕達が本当はどれだけ貧しいのかってことを教えてくれて、ありがとう！」**

同じ親という立場で、大富豪の父親の気持ちも何となく分かりますが、父親が一人勝手に思い考えている事なんか以上に、**子供の感性～感覚は鋭く真を見抜く力**があり、結果的には逆に父親自身が気づき勉強になったという話だと思います。
ただ日頃よりこの親子関係は、結果どうあれ愛情に満ちていて素晴らしい親子だからこその話だと思います。
私自身、考えさせられました！！

心の栄養剤No143-②「余命宣告」

本当は書くべきじゃないのかも知れんが、久々に堪らない思いになった。
一応、医者の端くれとして働いている。こういう生業だから、人の死に接するのは少なくない。
ちょっと前、診察に訪れた若者に余命宣告をしたばっかりだ。
俺：誠に申し上げにくいのですが･･･。
男：はい。
俺：･･･肺癌です。しかもだいぶ進んでいます。はっきり言います。1年もつかどうかです。
男：･･･ガ、
俺：？
男：ガーン･････　なんちって･･･。
俺：･･･け、結構余裕ですね･･･。
男：ええ、まあ･･･。

聞けば酒も煙草もやらないというのに、なんとも不憫な巡りあわせであった。
ただ、衝撃的な事実を告げられても、この歳でこれほど冷静なのにも驚いた。

男：ああー、参ったな。
俺：・・・
男：あの、入院とか治療の開始とか、すぐ始めないといけませんかね？
俺：ええ、それはもう。すぐにでも取り掛からないと。
男：うーん。一ヶ月待って頂けないですか？
俺：何かあるのですか？
男：母親が、来月楽しみにしていた旅行があるんです。俺がこんなんだって知ったら、とても安心して行けないでしょうし。
俺：そうですか。ですが猶予もそうないのが現状です。
男：ですよねえ。参ったなあ。そういや、再来月は父親の誕生日なんですよ。
俺：･･･
男：参ったな、ほんと、参った･･･。時間全然足りないですよ。まだ、親孝行してないんですよ。
段々と声が震えてくる。
男：両親に、いつか生でオーロラ見せてやるって約束したんですよ。このまんまじゃ、孝行どころか最悪の親不孝者じゃないですか・・・。

他にも、兄弟にああしてやりたかった、友人にこうしてやりたかった、職場で迷惑かける、など、自分の身の上よりも、あくまで周囲への迷惑が申し訳ないと悔やんでいた。
最後の方は泣き崩れてしまった。こんな状況ですら、**他人の事ばかり考えられるような若者が、どうして死を目前とせねばならないのだろうか。どれだけ体験したって、決して慣れるもんじゃない。そして、こんな若者一人救えない俺の不甲斐無さに、一緒に泣いてしまった。**

病気ではなく、病人の三大症状は、**初期**では〝ありがとう〟の言葉が徐々に少なくなってきて、**第二段階**で人の事を思いやれず、自分の事しか考えられなくなり～**末期症状**は、笑えなくなる、とある本に書いてあり、**誰も〝病気〟になってしまう事は、仕方ない事だが、〝病人〟になり下がってしまってはいけない**と書いてあったのを思い出し、思わずこの後、この青年に奇跡が起こってほしいと心より願っていました。
私自身も健康に携わる仕事をしている以上、誰もが逃れられない〝**生病老死**〟に直面した時、きちんと受け止めれるように日々精進して生きていかねば！！